

マルコの福音書 15章33-39節 主イエスの死

今日から聖週間又は受難週が始まり、キリストの死を覚え、一週間後に主の復活を祝います。この5ヶ月間、マルコの福音書11章から始まり、私たちはこの週の出来事を見ながら歩んできました。今日、私たちはマルコ書のすべてが積み上げ目指してきた出来事にたどり着きます。

復活が重要でないわけではありません。もちろん極めて重要です。それこそが、キリスト教をこの世の他のすべての人が考え作った宗教から区別するのです。しかし、今日のマルコ15章 33-39 節にあるキリストの死は、あらゆる犠牲と旧約聖書の預言のほとんど、そしてイエス様の生涯のすべての出来事が指し示し、私たちを導いてきたものなのです。

ジョン・ストットはその偉大な著書キリストの十字架の中で、イエス様についてこう書いています。主が何よりも覚えていてほしいと望まれたのは、御自分の死でした。十字架のないキリスト教は存在しないと言ってもよいでしょう。もし十字架が私たちの宗教の中心でないなら、私たちの宗教はイエス様の宗教ではありません。

そこで今日は、私たちの信仰の中心的な側面である、救い主イエス・キリストの十字架上の死に目を向けます。マルコの福音書15章33-39節から、イエス・キリストの死についての記述を読みましょう。

マルコの福音書15章33~39節 さて、十二時になったとき、闇が全地をおおい、午後三時まで続いた。 34 そして三時に、イエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」訳すと「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。 35 そばに立っていた人たちの何人かがこれを聞いて言った。「ほら、エリヤを呼んでいる。」 36 すると一人が駆け寄り、海綿に酸いぶどう酒を含ませて、葦の棒に付け、「待て。エリヤが降ろしに来るか見てみよう」と言って、イエスに飲ませようとした。 37 しかし、イエスは大声をあげて、息を引き取られた。 38 すると、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。 39 イエスの正面に立っていた百人隊長は、イエスがこのように息を引き取られたのを見て言った。「この方は本当に神の子であった。」

先週のことを思い起こしてください、イエス様が十字架にかけられたのは3時間目の午前9時でした。主はもうすでに3時間もの間、十字架に吊るされながら息をするために、引き裂かれ、血が流れる体を押し上げておられました。手足は十字架の木の梁に釘付けにされていました。正午に突然、明るい真昼の太陽が消えました。これが日食であった可能性はありません。科学者たちは、その時刻に日食が起こるはずがないと断言しています。砂嵐が太陽を覆ったと言う人もいますが、雨の多い春の季節にはありえないことでした。そうではなく、これは超自然的な、神が引き起こされた闇であり、少なくともイエスの周囲は暗闇に陥れられました。旧約聖書では、この暗闇は神が臨まれ、裁きに来られたことを知らせる警告として預言されていました。アモス書 8 章 9節には、神の裁きについてこう書かれています。

アモス書8章9節 その日には、一神である主のことば—わたしは真昼に太陽を沈ませ、白昼に地を暗くする。

3時間の間、神は世に裁きのしるしを与えておられましたが、後述するように、ほとんどの民がそのしるしを拒絶しました。しかし、いったい誰の裁きだったのでしょうか？このことは、この箇所次の部分に行くにつれて明らかになります。しかし、神は人類の罪を裁かれたのであり、その罪はイエス・キリストに負わせられました。この重要な真理を示す2つの節をすこし見てみましょう。

コリント人への手紙第二 5章 21節 神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方にあって神の義となるためです。

ペテロの手紙第一 2章24節 キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるため。その打ち傷のゆえに、あなたがたは癒やされた。

神は、御自身の裁きに本当に値する者を裁くのではなく、御自身の御子であるイエス様に対して、御自身の裁き、御怒りを注がれました。それは、私たち全員が受けるべき裁きでした。暗闇は、それが起こっていることを世界に知らせたのです。しかし、イエス様が死ぬ直前に十字架の

上から発した一言が、イエス様が罪に対する神の御怒りを体験していたことを如実に示しています。34節にはこうあります、

そして三時に、イエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」訳すと「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

エロイ、エロイ、レマ、サバクタニというイエス様の言葉は、主が話されたであろう原語のアラム語であり、マルコはアラム語を知らない異邦人の読者のためにギリシャ語訳をつけています。なぜこの言葉なのでしょう。なぜこの明らかに痛ましい悲しみの叫びなのでしょう。肉体的な拷問や苦しみの間中、イエス様からは怒りや苦しみの声は聞こえてきませんでした。今、十字架にかけられ、息を引き取る間際、イエス様はただ一つのこと、つまり神との何らかの形での別れを嘆いておられるのです。

さて、私たちはこれをよく調べなければなりません。というのも、このイエス様の発せられた言葉に関して、非常に非聖書的な指摘がなされているからです。多くの人々は、この時点でイエス様が叫んでいるのは、父なる神が私たちの罪を負われている御子なる神を罪を見ることができないために御自身を引き離されたからだと言っています。そこには真実のわずかな気配はありますが、その核心は間違っています。三位一体、御父なる神、御子なる神、聖霊なる神は一つの神であり三つの神ではないため分離することありえません。では、この時点で何が起きているのでしょうか？

私たちは、ゲッセマネの園で見た真理、すなわち、イエス様は唯一、完全な人間であると同時に完全な神であるという真理に立ち戻らなければなりません。神は決して御自身から切り離されることはありませんが、人であるイエス様は罪から来る切り離しを経験することができます。死の間際、イエス様は2つの異なる方法で、同時に神とのユニークな関係にあります。御子なる神であるイエス様は、御父なる神がイエス様を喜ばれておられ、イエス様のこの犠牲によって救いの道を開くことによって、御自身に栄光を帰されておられることをご存知でした。

しかし、私たちの罪を自ら背負った人である仲介者として、イエス様はまた、その罪のために人類が創造主から経験する離別を含め、私たちの罪に対する神の怒りを知り、その全てを経験されました。御子なる神イエス・キリストは、唯一の神の共有の御心に従順であり、御父に完全に愛され、いまだかつて起こらず、そして二度と起こりえない自らの死という方法によって御父を喜ばせたことをはっきりとご覧になりました。しかし同時に、御自分の上に置かれた人類の罪に対する聖なる神の怒りを完全に経験することができたのでした。イエス様は、私たちのすべての罪、罪による恥と罪悪感を御自身に負われ、神の怒りのすべてを経験され、叫ばれました。**わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか**—**わが神、わが神**、しかし、神の子によって語られたその言葉の中にさえ、私たちの罪を背負いながらも、イエス様というお方が、御自分の神、すなわち「わが神、わが神」を知っておられることがわかります。わが神、わが神。その関係はまだそこにあります。そして実際、これは詩篇22篇1節からの引用です。

詩篇 22篇 1節. わが神 わが神 どうして私をお見捨てになったのですか。私を救わず 遠く離れておられるのですか。私のうめきのことばにもかかわらず。

詩篇22篇は磔、イエス様の十字架上の死、の預言ですが、他の旧約聖書の引用と同じように、その詩篇の文脈全体を見るべきです。そして、詩篇22篇の最初の部分は明らかにいけにえに焦点を当てていますが、復活の希望で終わっています。

詩篇 22篇 27節 救ってください。獅子の口から 野牛の角から。あなたは 私に答えてくださいました。

つまり、離別と苦痛に満ちたこの最後の言葉の中にも、3日後に待ち受ける希望の光があります！そこで、キリストが死ぬ前に語った最後の言葉を要約するために、ジョンティ・ローズ牧師がクロスウェイに寄稿した記事からの引用をお示ししましょう。キリストは、御子として、また忠実な僕として、神は「自分のために」おられるという確信と、私たちの身代わりとして、また私たちの代理人として、神は「自分に」敵対しておられるという確信の両方を、あの一つの叫びの中に表現されました。**わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか？**この叫びは、贖罪やイエス様の苦しまれたことについてすべてを語っているわけではありません

が、私たちが決して直面することのない暗闇の中にイエス様は入って行かれたということによって私たちを安心させてくれます。

今日、私たちはこの言葉を読み、たとえ常に完全に理解しないとしても、その重要性を即座に認識しますが、それをその場で見ていた民、あるいはほとんどの人々は、イエス様の死と彼が語ったこの言葉の意味を完全に見失っていました。実際、彼らはイエス様がエリヤに向かって叫んでいると思っていたのです。ユダヤ人には、エリヤは死ぬことなく天に召されたので、時々戻って来て義人を守り、彼らを救うという迷信がありました。ですから彼らの考えでは、イエス様はマルコ書10章45節に記されている自分の人生の使命を果たすのではなく、ユダヤ人の迷信に従って行動していただけなのでした。**マルコの福音書 10章45節 人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。**キリストの死は私たちの信仰の中心であり、キリストの死に際して、その理由を示す2つの重要な出来事が語られています。この二つの出来事は、キリストの死が過去現在未来のすべての歴史に及ぼした影響に関連しています。最初の出来事は38節に見ます。**38すると、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。**さて、なぜこれが重要だったのでしょうか。スクリーン上に神殿の写真が映っています。神殿には2つの帳がありました。ひとつ目はユダヤ人が入って礼拝するイスラエルの庭の前に、もうひとつはその先の契約の箱の中に神御自身の御臨在が宿る至聖所を覆っていました。この頃、契約の箱は歴史の中に失われていましたが、神殿の幕とヨム・キプールと呼ばれる年に一度の贖罪のいけにえは残っていました。贖罪の日、ヨム・キプール、とは、大祭司だけが至聖所に入り、イスラエルの民に代わっていけにえをささげ、国民として神の御前で罪を贖うことができる毎年1日のことです。大祭司だけがその日だけにできることです。

これは、旧約聖書の中で、大祭司が少しでも汚れた状態で至聖所に入ると死ぬと神が警告されていたほど重要な出来事でした。つまり、神の御臨在は、現実的な意味で、年に一度、この一人の人に限定されていたのです。しかし、イエスの死が起こり、この幕は紙切れのように引き裂かれました。それはどれほど大変なことだったのでしょうか。この幕を引き裂くことは人間には不可能だったでしょう。高さ60フィート（18.3メートル）、幅30フィート（9メートル）、厚さは4インチ（10.1センチ）で、何層にも編まれていました。下から上へ裂くのは難しく、何らかの切断道具が必要だったでしょう。上から下へ裂くのは不可能だったでしょう。再び、私たちにメッセージを送るために、先ほどの暗闇と同じように超自然的な事が起こっています。神の送られたメッセージとは何だったのでしょうか？イエス様が十字架で死なれたとき、その死によって神の御臨在に誰でもアクセスできるようになりました。それはもはや、神と人との間の隔たりを表す幕を裂くことのない、また裂くことのできないいけにえを捧げる人間の祭司に限定されたものではなくなりました。イエス様の十字架上の贖いの犠牲によって、イエス様を信じるすべての人が神のもとに来ることができるようになったのです。

イエス様の死によって成し遂げられたことを、人間の大祭司ができるはずがありません。しかし、イエス様の死と同時に起こった第二の重要な出来事がありました。39節にこうあります。

39 イエスの正面に立っていた百人隊長は、イエスがこのように息を引き取られたのを見て言った。「この方は本当に神の子であった。」

十字架刑を見ていた人々は、イエス様がエリヤを呼ぶために叫んでいるのだと思い、十字架刑のポイントを完全に見落としていたと言ったのを覚えていますか？その日、十字架を見ていた人の中に、キリストが来られた真の目的を見抜いた人がいました。それは意外な人物で、イエス様を十字架につける兵士たちを指揮していた百人隊長でした。この告白によって、マルコの福音書の目的が成就したのです。マルコの福音書を読み始めた2023年、私たちはマルコによる福音書1章1節から始めました。

マルコの福音書 1章1節 神の子、イエス・キリストの福音のはじめ。

聖霊の靈感を受けたマルコの最大であり唯一の目標は、人々にイエス様を神の御子と知ってもらうことでした。そしてマルコの福音書全体を通して、イエス様が神の子であることを完全に見抜き、宣言している人間は他にいません。マルコの福音書の中でイエス様が神の御子、三位一体の第二位格として認識されるのは、悪霊たちによってだけでした。

マルコの福音書3章17節 汚れた霊どもは、イエスを見るたびに御前にひれ伏して「あなたは神の子です」と叫んだ。サタンはイエス様が誰であることを知っており、イエス様を殺させることで神の救いの御計画を打ち破ったと考えました。しかし、サタンはイエス様が神であることは知っていたかもしれませんが、イエス様の死によって聖書が成就することは予見できませんでした。創世記 3章 15節で**創世記 3篇 15節 彼はおまえの頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ。**

神がサタンに約束されたそのお方、イエス様は十字架上の死によってサタンの力に致命的な打撃を与え、死からよみがえることによって完全な勝利を宣言されました。イエス様は敗北するどころか、イエス様を神の御子として信じ、救い主として受け入れる人を救う使命を果たしたのでした。そして、イエス様のアイデンティティを最初に認識したのは、弟子ではなく、ユダヤ人です。彼は異邦人であり、ローマの軍事指導者であったが、イエス様の死にイエス様の本性を見抜き、イエス様を神の御子として信じ受け入れた最初の人間となりました。マルコの福音書 8章で、イエス様をキリストと宣言したペテロでさえ、イエス様をメシアと認めたが、神とは認めませんでした。今、イエス様の死によって、彼が私たちの救い主であり得る理由が明らかになりました。イエス様は神の御子なのです。

イエス様をあざけた傍観者や通行人とは違って、この百人隊長はイエス様の正面に立ち向き合っていました。彼はこの十字架につけられた人を直視し、彼が死んだ理由を自問しました。そして、誰かが戦わずして進んで十字架にかかり、明らかに精神的な苦痛を感じながらも、その痛ましい叫びの中で天の神との関係を宣言する唯一の考えられる理由はこの人が人を遥かに超える存在である、神の御子であることでした。

十字架は神が人類と出会う場所であり、私たちはその十字架上のイエスへの応答に基づいて、神との関係が修復されるのです。百人隊長のこの信仰告白は、イエスに会ったことがなかったであろう彼の既存の知識に基づくものではありませんでした。弟子たちが経験したようなイエス様との近い関係、あるいは旧約聖書を持っていたユダヤ人たちの知識に基づくものではありませんでした。特権に基づくものでもありませんでした。宗教指導者たちやピラトのように身分により社会的特権を持つ者たちは、イエス様を拒絶していました。その代わりに、彼がキリストを告白したのは、十字架上で起こった彼の罪の贖いのための御業によって、神御自身から与えられた信仰の証となる行為なのです。

他の大勢の人たちは見えても、歩き去りましたが、神はこの人の目を開かれイエス様が私たちの罪を負い、創造主と私たちとの間にある罪の障壁を取り払われたのを見ることを可能にしてくださったのでした。そして彼は、神のみがこれを行うことができると認識しました。イエス様が誰であり、なぜ死なれたのかを信じるという彼のこの信仰宣言の中で、私たちもイエス様の死に対する私たちの応答がどうあるべきかを理解することになります。それは百人隊長の信仰と同じであるべきです。イエス・キリストへの信仰、イエス・キリストが御自身を神であると宣言されたお方であること、そしてイエス・キリストがあなたの罪のため進んで死なれ、あなたの罪の罰を受けられたことを信じることです。しかし、イエス様への真の信仰は、常に人生を変える結果となります。

イギリスの偉大な宣教師、C.T.スタッドがかつて言ったように、イエス・キリストが神であり、私のために死んでくださったのなら、私が彼のために捧げるどんな犠牲も大きすぎるはずがありません。だからこそ、C.T.スタッドは詩にも書くことができたのでした。一つの命はすぐに過ぎ去る。キリストのためになされたことだけがいつまでも残る。

この犠牲とそれに対する私たちの応答は、主の晩餐に参加するたびに思い起こされることです。もしあなたがイエス・キリストを知っていて、イエス様を主であり救い主として受け入れ、主に従順にバプテスマを受けておられるならば、ぜひこの食事に参加してください。もしそうでないなら、参加しないでください。親御さんにとって、お子さんにこの食事の大切さを教える最善の方法は、準備ができていない場合は参加させないことです。私が祈った後、執事が礼拝堂の四隅からパンと杯をお配ります。祈りましょう。

Mark 15:33-39 Jesus's death

Today begins holy week, when we remember the death of Christ and celebrate a week from now, his resurrection. For the past 5 months, starting with Mark 11, we have been walking through the events of this week. Today, we come to the event that all of the book of Mark has been building towards. Its not that the resurrection is unimportant...it is extremely important. It is what sets Christianity apart from all the other man made religions in this world. But the death of Christ that we see in our passage today in Mark 15:33-39 is what every sacrifice and most of the prophecies of the Old Testament and all the events of Jesus's life have been pointing to and leading us towards. John Stott in his great book, *The Cross of Christ* wrote of Jesus, "it was by his death that he wished above all else to be remembered. There is then, it is safe to say, no Christianity without the cross. If the cross is not central to our religion, ours is not the religion of Jesus." So today, we turn our attention to the central facet of our faith, the death on the cross of our Savior Jesus Christ. Let's read the account of his death here in Mark from Mark 15:33-39 ³³ And when the sixth hour^[a] had come, there was darkness over the whole land until the ninth hour.^[b]³⁴ And at the ninth hour Jesus cried with a loud voice, "Eloi, Eloi, lema sabachthani?" which means, "My God, my God, why have you forsaken me?" ³⁵ And some of the bystanders hearing it said, "Behold, he is calling Elijah." ³⁶ And someone ran and filled a sponge with sour wine, put it on a reed and gave it to him to drink, saying, "Wait, let us see whether Elijah will come to take him down." ³⁷ And Jesus uttered a loud cry and breathed his last. ³⁸ And the curtain of the temple was torn in two, from top to bottom. ³⁹ And when the centurion, who stood facing him, saw that in this way he^[c] breathed his last, he said, "Truly this man was the Son^[d] of God!"

Remember from last week, Jesus was crucified at the third hour, 9AM. He has now hung on the cross for 3 hours pushing himself up for breath on torn and bleeding flesh, his hands and feet nailed to the wooden beams of the cross. When suddenly at noon, the bright mid-day sun goes out. There is no possibility that this was an eclipse. Scientists are certain there would not have been an eclipse at that time. Some have tried to say a dust storm covered the sun, but that seems unlikely during the wet spring season that would have been happening during this time. No, this was a supernatural, God caused darkness that plunged the world, at least around Jesus, into darkness. The darkness was prophesied in the Old Testament as a warning to let us know that God was present and had come to judge. In [Amos 8:9](#) speaking about God's judgement we read, "[And on that day,](#)" declares the Lord God, "[I will make the sun go down at noon and darken the earth in broad daylight.](#)" For three hours, God was giving a sign of his judgement to the world, but as we will see most rejected that sign. But exactly whose judgement was it that was being signaled? This will become clearer as we get to the next part of this passage. But God was judging mankind's sin, which had been imputed or put into Jesus Christ. Let's look briefly at two verses that show this important truth. [2Corinthians 5:21](#) says, [For our sake he made him to be sin who knew no sin, so that in him we might become the righteousness of God.](#) And [1Peter 2:24](#) says, [He himself bore our sins in his body on the tree, that we might die to sin and live to righteousness. By his wounds you have been healed.](#) Rather than judging the ones who truly deserved his judgement, God poured out his judgement, his wrath, against his own Son, Jesus; and it was judgement that all of us deserved. The darkness signaled to the world that this was happening.

But it is in the one statement that Jesus makes from the cross just before he dies that really shows us that he was experiencing God's wrath against sin. Verse 34 says, [And at](#)

the ninth hour Jesus cried with a loud voice, “Eloi, Eloi, lema sabachthani?” which means, “My God, my God, why have you forsaken me?” The statement **Eloi Eloi Lema Sabachthani** is the original aramaic which Jesus would have spoken, and then Mark provides a Greek translation for his Gentile readers who did not know Aramaic. Why these words, why this clearly painful cry of grief? All through the physical torture and suffering, there is no sound from Jesus of anger or suffering, but now as he hangs on the cross with his dying breath, he laments one thing – separation in some way from God. Now we have to examine this closely, because there have been some very unbiblical points made about this statement. Many have said that at this point, Jesus cries out because God the Father has separated himself from God the Son because he is bearing our sin and God cannot look upon sin. There is a hint of the truth in there, but at its core it is wrong. The Trinity, God the Father, God the Son, and God the Holy Spirit cannot be separated, because they are ONE God, not three gods. So what is happening at this point?

We have to go back to the truth we saw in the Garden of Gethsemane, that Jesus is uniquely both fully human and fully God. While God can never be separated from himself, Jesus as a human can experience the separation that comes from sin. At the point of his death, Jesus is in a unique relationship with God in two very different ways, at the same time. As the God the Son, he knew that God the Father delighted in him and was glorifying himself through him by making a way to salvation through this sacrifice. But as our human mediator, taking our sins onto himself, he also knew and fully experienced God’s wrath against our sin, including the separation that humanity experiences from our creator because of that sin. Jesus Christ, God the son saw clearly that he was obedient to the shared will of the One God and fully and completely loved by the Father and pleasing him in a way that had not happened previously and can never happen again, by his own death. Yet, at the very same time, he could experience fully the anger of a Holy God against the sin of humanity placed on him. Jesus has taken upon himself all the sin, and shame and guilt that comes with our sin, and experiencing all of God’s wrath, cries out, “**My God My God why have you forsaken me?**” But even in those words spoken by the Son of God we see that even while bearing our sin, the man Jesus still knows his God – **My God, My God...** The relationship is still there. And in fact this is a quote that comes from **Psalm 22:1 My God, my God, why have you forsaken me? Why are you so far from saving me, from the words of my groaning?** Psalm 22 is a prophecy of the crucifixion, but just like other Old Testament quotes, we should look at the entire context of that Psalm. And while the first part of Psalm 22 is clearly focusing on Sacrifice, the Psalm ends with the hope of resurrection. **Psalm 22:21 says, Save me from the mouth of the lion! You have rescued me from the horns of the wild oxen!** So, even in these final words of separation and pain, there is a glimmer of the hope that lies ahead three days later! We read these words today and see immediately the significance of them, even if we don’t always fully understand them, but the people watching, or most of them completely missed the point of Jesus’s death and these words he spoke. In fact they thought he was crying out for Elijah. There was a Jewish superstition that because Elijah was taken up into heaven without suffering death that he would return occasionally to protect the righteous and rescue them. So, in their minds, Jesus was simply acting on Jewish superstitions rather than fulfilling his life’s purpose described in **Mark 10:45, 45 For even the Son of Man came not to be served but to serve, and to give his life as a ransom for many.”**

The death of Christ is central to our faith, and at his death, we are told about two key events that happened when he died that demonstrate why that is so. Both of these events are related to the effects that his death had on all of history, past present and future. The first event we see is in verse 38, **And the curtain of the temple was torn in two, from top to bottom.** Now, why was this significant. **On the screen, you can see a picture of the temple.**

There were two veils in the temple. **One before the court of Israel** where Jewish men could enter and worship and the second on past that **covered the Holy of Holies** where the presence of God himself dwelled in the Ark of the Covenant. By this time, the ark of the covenant had been lost to history, but the veil and annual sacrifice of atonement called Yom Kippor remained. The day of atonement or Yom Kippor was the one day each year when the high priest alone could enter the holy of holies and offer a sacrifice on behalf of the people of Israel to atone for their sins before God as a nation. Only the high priest could do this, and only on that day. This was such a significant event that God had warned in the Old Testament that the high priest would die if he entered the holy of holies in any way impure. So, the presence of God was in a very real sense limited to this one man once a year. But then Jesus's death happened, and this veil was torn like a piece of paper. Understand how difficult that was. This veil would have been impossible for a human to rip apart. It was 60 feet or 18.3 meters high and 30 feet or 9 meters wide. It was 4 inches thick, with many layers of woven material. It would have been difficult to rip from bottom to top and would have required some sort of cutting tool, but ripping it apart from top to bottom would have been impossible. Once again, we have a supernatural act happening just like the darkness to send us a message. And what was that message that God was sending? When Jesus died on the cross, his death made God's presence accessible to anyone. No longer was it limited to a human priest on a limited basis offering a sacrifice that did not and could not tear open that curtain representing the divide between God and man. It took Jesus's sacrifice of atonement on the cross that made it possible for all who believe in him to come to God. No human high priest could do what Jesus accomplished by his death.

But there was a second significant event that took place upon Jesus's death. Verse 39 says, ³⁹ **And when the centurion, who stood facing him, saw that in this way he breathed his last, he said, "Truly this man was the Son of God!"** Remember I said the people watching completely missed the point of the crucifixion when they thought Jesus was crying for Elijah? There was one person watching that cross that day, in fact the person likely organizing the event, who saw the true purpose of Christ's coming. It was an unexpected person, the Centurion in charge of the soldiers responsible for crucifying Jesus. In this confession, we see the purpose of the gospel of Mark fulfilled. Back in 2023 when we began to work our way through Mark, we began with **Mark 1:1 which begins, The beginning of the gospel of Jesus Christ, the Son of God.** Mark's entire goal under the inspiration of the Holy Spirit was to have people see Jesus as the Son of God. And all through the gospel of Mark no other human fully sees and declares that Jesus is the Son of God. The only time Jesus is recognized as the Son of God, as the Second person of the Trinity in Mark up to this point is by demons. **Mark 3:11 says, And whenever the unclean spirits saw him, they fell down before him and cried out, "You are the Son of God."** Satan knew who Jesus was and thought he had defeated God's plan for salvation by having him killed. But although Satan may have known Jesus's identity as God, he could not foresee that in

his death Scripture was fulfilled. The one who God had promised Satan in [Genesis 3:15](#) that “he shall bruise your head, and you shall bruise his heel...” had dealt a deathblow to Satan’s power by his death on the cross and would declare complete and total victory by rising from the dead. Rather than defeat, Jesus completed his mission to save humans who believe in him as God’s Son and accept him as their savior. And the first to recognize his identity was not a disciple, was not even Jewish. He was a gentile, Roman military leader, who saw in Jesus’s death, the true nature of Jesus and became the first human to believe and accept him as the Son of God. Even Peter’s declaration of Jesus as the Christ in Mark 8, recognized him as the Messiah, but not God. Now, in his death, the reason he can be our Savior is made clear. He is the Son of God. Unlike the bystanders and passers by who mocked Jesus, this centurion **stood facing him**. He was willing to look directly at this crucified man and ask himself why he died. And the only reason he could find that someone would willingly go to the cross without a fight, would clearly be in emotional pain, but declaring a relationship with the God of Heaven in his painful cry, is that this man was more than a man, he was the **Son of God**.

The cross is where God meets humanity and we are reunited with him based on our response to Jesus on that cross. This confession of faith on the part of the centurion was not based on his existing knowledge, because he likely had never met Jesus before. It was not based on his nearness to Jesus like the disciples had experienced or the Jews who had the Old Testament. It was not based on privilege. Those who society privileged based on their position like the religious leaders and Pilate had rejected Jesus. Instead his confession of Christ is an act of faith given by God himself in the act of atonement for his sin happening on the cross. Many others saw and walked on, but God allowed this man to have his eyes opened to what was happening on the cross as Jesus was taking our sin on himself and making it possible for the barrier of sin to be broken down between us and our Creator. And he recognized that only God could do this. In this declaration of his belief in who Jesus was and why he died, we also come to understand what our response should be to Jesus’s death. It should be the same as that of the centurion – faith. Faith in Jesus Christ, that he was who he declared himself to be – God, and that he willingly died for your sins and took the punishment for your sin. But real faith in Jesus always results in a changed life. As the great British missionary, [CT Studd once said, if Jesus Christ be God and died for me, then no sacrifice can be too great for me to make for him](#). This is why CT Studd could also write in poetry [Only one life 'twill soon be past. Only what's done for Christ will last](#). This sacrifice and our response to it is what we are reminded of every time we participate in the Lord’s Supper. If you know Jesus Christ, and have accepted him as your Lord and Savior and been obedient to him by being baptized, then I invite you to join in this meal. If this does not describe you then I would ask you to not participate. For parents, the best way to teach your children the importance of this meal is to not let them participate if they are not ready. After I pray the Deacons will serve the bread and the cup from the four corners of the sanctuary and we will eat together and drink together. Let’s pray.